

白氏文集 十六 驪宮高

加藤淳平

今回より解説は文語にて記すこととせむ（但し詩の大意は口語）。白樂天の仕へたる憲宗皇帝の、國の財政を慮り、離宮への行幸を控ふるを稱揚する詩なり。

驪宮高

驪宮高し

美天子重惜人之財力也 天子が人の財力を重惜するを美むる也

高高驪山上有宮

高高たる驪山 上に宮有り

朱樓紫殿三四重

朱樓紫殿 三四重

遲遲兮春日 玉盤暖兮溫泉溢 遲遲たる春日に 玉盤暖かに溫泉溢る

嫋嫋兮秋風 山蟬鳴兮宮樹紅 嫋嫋たる秋風に 山蟬鳴きて宮樹紅なり

翠華不來歲月久

翠華來らず 歲月久し

牆有衣兮瓦有松

牆に衣有り 瓦に松有り

.....

.....

吾君不遊有深意

吾が君遊ばざるは 深意有り

一人出兮不容易

一人出づること 容易ならず

六宮從兮百司備

六宮從ひ 百司備はる

八十一車千萬騎

八十一車 千萬騎

朝有宴飫暮有賜

朝に宴飫有り暮に賜有り

中人之產數百家

中人の產 數百家

未足充君一日費

未だ君が一日の費に充つるに足らず

吾君修己人不知

吾が君己れを修むるも 人知らず

不自逸兮不自嬉

自から逸せず自から嬉せず

吾君愛人人不識

吾が君人を愛するも 人識らず

不傷財兮不傷力

財を傷はず 力を傷はず

驪宮高兮高人雲

驪宮高し 高くして雲に入る

君之來兮爲一身

君の來るは 一身の爲なり

君之不來爲萬人

君の來らざるは 萬人の爲なり

（大意） 高い驪山、その上に離宮があり、朱の樓閣と紫の宮殿が三層四層に重なる。暮れるのが遅い春の日、玉の敷瓦は暖まり溫泉が溢れる。柔らかに秋風が吹いて、山の蟬が鳴いて離宮の樹は紅葉する。吾が憲宗皇帝が離宮においてにならないのは深い意圖をお持ちになつて居られるからである。皇帝お一人の御行樂は容易なことではない。六宮の女官たちが隨從し、百官も皆揃ふ。八十一の車が並び、千萬騎の武人が従ひ、朝から盛大な宴會、晩には皇帝からの御前下賜品が出る。中ほどの人數百家の資産でも、皇帝の一日の御行樂の費用に充當するに足りない。吾が君が御自ら自制していらつしやるのに人は知らな

い。御自らは安逸を追求なさつたり、行樂を喜んだりはなさらない。吾が君が民を愛して居られるのに人は存じ上げない。國の財産を蕩盡なさつたり、國の力を弱めたりされない。驪山の離宮は高く、雲が懸かるほどである。皇帝がこの離宮においでになるのは、一身の御遊樂の爲であり、おいでにならないのは萬人の爲である。

(平成二十九年三月十五日受附)